

協働契約 事業実施結果報告書

1 事業概要

受託者及び代表者氏名	公益財団法人 尼崎市文化振興財団 副理事長 村山保夫
事業名	令和6年度 文化振興事業 (尼崎市民芸術賞、尼崎市文化功労賞、尼崎市文化未来奨励賞、白髪一雄現代美術賞、近松賞、尼崎市展、尼崎市文芸祭、ふれあいギャラリー、富松薪能、尼崎薪能、尼崎市演劇祭、文楽公演又は歌舞伎公演、近松祭、近松ナウ、尼崎落研選手権、新人お笑い尼崎大賞)

2 事業評価

(1) 協働側面の評価

実施手順

- ・下表について、相互に自己採点する。評価基準は次のとおりとする
A（よくできた）、B（まあまあできた）、C（あまりできなかった）、D（まったくできなかった）
- ・結果を共有し、差異がみられる項目を中心に、原因や改善策等について意見交換を行う
- ・協議内容は「3 総合評価」に記載する
- ・結果を共有する際は、衝突を恐れず、互いを尊重しながら、率直な意見交換を行うこと。

項目	団体等	所管課
1 事業計画（準備）段階		
(1) 課題や目標について共有し、理解し合うことができたか	A	A
(2) 相手の立場や組織、ルール等を共有し、理解し合うことができたか	B	B
(3) それぞれの強み弱みを理解し、補い合いながら計画を立てられたか	B	B
2 事業実施段階		
(1) 率直な意見交換を行い、理解し合いながら、対等な立場で実施できたか	A	A
(2) 予定外のことにについて、協力して対応することができたか	B	B
(3) 役割分担にとらわれて任せっきりにすることなく、主体的に関われたか	B	B
(4) 実施中に目標や進捗を共有し、改善しながら進めることができたか	A	A
その他（任意で設定する項目、項目数は不問）		
(1)		
(2)		
(3)		

(2) 事業効果の評価

実施手順

- ・事業実施前を目途に、協議・合意の上、一つ以上設定する
- ・事業の効果が客観的に測れるよう、受益者の評価など、アウトカム指標を原則とする

	項目	内容
1	評価指標	尼崎市文芸祭が若い世代の創作につながるものとなっているか
	測定方法	尼崎市文芸祭の応募作品数に占める「ジュニア」作品数の割合
	結果	37.2%（応募作品数 4,298、うちジュニア 1,599） 【参考】R5 年度 10.5%（応募作品数 2,990、うち 10 代 314） 尼崎市文芸祭は、応募者の高齢化が著しく、R5 年度は年代の記載のあった応募作品数のうち 70 代以上の割合が 59.2%であった。 そのため、若い世代にも川柳・短歌・俳句に親しんでもらえるよう、R6 年度には新たに「ジュニア賞」を創設した。募集にあたっては、「ジュニア賞」を PR する広報物を作成し、市内小中学校・高校の国語教諭に周知を行った。 その結果、市内外の中学校・高校 4 校から団体応募があるなど、多数の「ジュニア」作品の応募があった。 「ジュニア賞」の創設が、若い世代の川柳・短歌・俳句の創作につながったところもあるが、団体応募による応募数の急増が選考事務への負荷ともなったことから、R7 年度に向けては応募条件の変更を検討し、引き続き、若い世代の創作につながる事業となるよう取り組むこととする。
2	評価指標	近松賞の上演が市民にとって文化・芸術を楽しむ機会となっているか
	測定方法	第 8 回近松賞「宇宙に缶詰」上演 入場者数／満足度
	結果	入場者数 1,110 人／満足度（とてもよかった・よかった）84.1% 【参考】入場者数 第 7 回近松賞「馬留徳三郎の一日」（R2 年度） 586 人 第 6 回「砂壁の部屋」（H28 年度） 1,238 人 R4 年度に受賞作が決定した第 8 回近松賞の上演を、市・（公財）尼崎市文化振興財団・兵庫県立尼崎青少年創造劇場の共催事業として実施した。 入場者数は伸び悩んだが、入場者の 8 割以上の方に満足いただけた。また、本公演は関西えんげき大賞の優秀作品賞を受賞した。 上演前に財団がトークイベントを企画・実施するなど、上演に向けて創意工夫しながら取り組むことができたが、次回上演時にはより多くの市民に届くような広報に取り組むこととする。
3	評価指標	文楽体験教室が市民にとって文化・芸術を楽しむ機会となっているか
	測定方法	「はじめての文楽体験教室」 入場者数／満足度
	結果	入場者数 107 人／満足度（とてもよかった・よかった）95.2% 【参考】入場者数 R5 年度 尼崎文楽公演 2 公演 391 人 R3 年度 尼崎文楽公演 2 公演 348 人

		近松門左衛門ゆかりのまちとして、市民が文楽に親しむため、以前より実施してきた文楽公演では、入場者数の増加や新たな層への働きかけが課題とされてきた。 そのため、文楽になじみのない方や、子どもたちに楽しんでいただけるよう、R6 年度は、解説付の実演や体験コーナーを含む体験教室として、無料で開催した。 市内小中学校・高校の児童・生徒にチラシを配布するなど周知を行った結果、親子連れや部活単位での中学生、高齢の方々など、幅広い年齢層の方の参加がみられた。 参加者数は定員 200 人に対して申込者数 166 人（充足率 83.0%）、当日の入場者数は 107 人であった。アンケートでは「良かった」59 人、「よくなかった」0 人、無回答 3 人であり、極めて満足度が高かった。 今後も、文楽に親しみやすい事業展開に取り組むこととする。
--	--	--

3 総合評価

協働側面の評価	
＜成果＞	協働契約に含まれる事業が多数あるため、3事業を取り上げ、事業計画（準備）段階、事業実施段階等に協議の場を設けて、意見交換を行った。財団の補助事業として長年運営しているため、所管課が実態や課題を十分に把握できていない面もあったが、率直に意見交換をする中で、事業の改善イメージを共有することができた。
＜改善が必要なこと＞	所管課の役割が限定的であり、担うべき役割を事前に協議することも必要だった。
事業効果の評価	
＜成果＞	長年運営している事業について、協議する場を設けたことで、改善内容を考える機会となった。
＜改善が必要なこと＞	事業実施にあたり、余裕を持ったスケジュールで準備することで、所管課でも広報の役割を担える部分も増えると考えられる。
総評	
課題や目標を共有することで、協働の側面を強化し、事業効果を高めていくことができると考えられるため、次年度も別事業を取り上げながら、引き続き協議の場を設け、取り組んでいく。	